

# 1850－1930年代におけるシャムの書籍出版ビジネスの発展

－出版資本と出版文化の関係の変遷史－

ウィパーウィークン クリッタポン\*

## The development of Siamese book publishing business during 1850-1930s: The transition of relationship between print capital and print culture

Krittaphol Viphaveekul\*

### Abstract

Although the book publishing in Siam has significantly developed during the 20<sup>th</sup> century the developments of production and circulation processes and also the relation between print capital and print culture have not been clarified. This article's purposes are: (1) to explore the development of Siamese book publishing business from 1850-1930s along with the political, economic, socio-cultural and technical changes and (2) to track the development of relationship between print capital and print culture in the period. From view point of cultural industry, this article focuses on publishing entrepreneurs' activities in production and circulation of books as commoditization of print culture. Moreover, this research analyzes the development of business along with changes of circumstances during the period. By historical method, the research utilizes biography books of representative persons involving the business and books or documents of relating companies and institutions to clarify the development. The study has been found that since the Bowring treaty in 1855, the Siamese book publishing business has developed along with the political, economic, socio-cultural and technical changes in the country due to the modernization process. During the 1920s-1930s, the book publishing business in Bangkok has grown significantly both in scale and diversity. Not only Siamese elites, but the middle class such as low-mid ranked officials and Chinese merchants also play important roles in developing the book publishing business and creating the early modern style of Siamese books.

**Key words :** Book publishing, Cultural industry, Print capital, Print culture

---

\* 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士後期課程 : PhD Program, Graduate School of Asia-Pacific Studies, Waseda University  
Email: krittapholv\_119@akane.waseda.jp

## 1. 研究背景

タイにおいては、19世紀にアメリカ宣教師により印刷技術が導入され、20世紀において書籍出版が普及するようになった。しかしながら、書籍出版ビジネスの発展に関する研究が盛んであるとはいえない。タイの歴史に関する先行研究の多くは「想像の共同体」(Imagined community) (アンダーソン 2007) や「公共圏」(Public sphere) (Habermas 1989) などの基本的な考え方によって、出版物を通じて社会・政治的变化を分析するものであり、産業以外の現象を考察する傾向にある (Jory 2001; Thanaphol 2008; Ito 2012)。しかし、書籍出版自体がどのように発展してきたかと言った問題点を議論するには、至っていない。

一方、書籍出版に関する先行研究は、ビジネスの発展に言及して議論している (Amphai 1972; Chusri 1975; Sukanya 1977; Matichon 2006) ものの、経済・文化・技術的变化と結び付けて発展を詳細に分析した研究は、調査した限り見当たらない。また、時代ごとに偉人や知識人など、人物を中心にして出版史を詳細に記述した研究が見られる (Craig 1973; Sukanya 1985; Sukanya 1988; Boonpisit 2013)。しかし、文化を製品化する文化産業の1つである書籍出版ビジネスは、資本と文化とに深い関係をもっている。ただし、タイでは、出版資本と出版文化の関係の変遷を中心にしてどのように発展したかは、明らかになっていない。

19世紀後半にタイ (当時シャムと称された) の政治・経済・社会的環境は、大幅に変化した。1855年にボーリング条約 (Bowring Treaty)<sup>(1)</sup> が結ばれたシャムでは、自由貿易や国際交流が開始され、官僚制、教育制、経済制などの改革が始まり、近代化時代を迎えた。さらに、第2次世界大戦までに、シャムの支配層と一般平民の知識人は、互いに欧米のような「文明化」(Siwilai) を求めていた<sup>(2)</sup>。出版はそれらの欧米的文化の1つであるが、これまでのタイ史研究では、欧米の影響を受けた文化と資本の関係、とりわけ書籍出版ビジネスの発展を考察するには至っていない。

上記のように、戦前におけるタイの書籍出版ビジネスの発展とその発展の基礎になった資本と文化の関係が、どのように変遷していたかと言う問題点は、明らかになっていない。こうした問題点を明らかにするために、本研究は、政治・経済・社会・技術などの環境変化をビジネスの発展と結び付け、資本と文化の関係の変遷に焦点を当てた文化産業論の観点に立って、1850-1930年代におけるビジネスを分析する。研究方法は、ブラッドリー、スミス、モンクット王、ワチラヤーン図書館、コーソーロー・グループ、ワット・コ印刷所、アクソンラニット印刷所などのシャムの書籍出版に関わった代表的な人物の伝記や機関・企業の社史などの資料研究に基づき、歴史的アプローチによりビジネスの発展を明らかにしたい。ところで、出版物とは、一般的には書籍・新聞・雑誌のことを指すが、新聞・雑誌は、定期発行物で広告産業の媒体として主な利益を広告収入より得ている。そのため、本稿は、広告との関係が低く書籍市場と読者のニーズに従う書籍出版ビジネスを中心に研究する<sup>(3)</sup>。

本稿の構成は、第2節で文化産業論の観点、第3節でシャムにおける初期の出版 (1830-1850年代)、第4節で宣教師による出版資本の出現 (1850-1880年代)、第5節でシャム人による出版資本の初期 (1880-1910年代)、第6節で戦前における出版資本の発展を考察する。

## 2. 文化産業論の観点

文化産業（Cultural industry）あるいは文化生産（Cultural production）の理論は、政治・経済・社会・技術の環境変化に関連付けながら、文化を製品化する文化産業の生産・流通の過程を分析する分野である。すなわち、文化産業論は、映画、演劇、絵画、書籍などの文化製品を生産する過程において、生産手段を所有する資本家により、文化の製品化がどのように成立したかと言う点を考察するものである。しかし、文化産業論は、供給側を中心に検討するが、需要側の消費の影響を全く見逃すわけではない。生産と消費のそれぞれの行為を分離することではなく、総合的な1つの行為として分析する。

文化産業論の研究者は、文化産業の特徴について次のように主張する。文化製品は、個性や創造性があり、消費者ニーズによる価格メカニズムだけでは、文化製品の価値を反映できない恐れがある。カーベスは、買い手と売り手の両者が情報の非対称性と言う問題に陥ることを指摘する。買い手は、文化製品を消費しなければ製品の価値がわからない一方で、売り手は、事前に消費者のニーズを正確に予測できない。つまり、文化製品産業は、成功するかどうか誰も知らない製品を生産する過程である（Caves 2000, pp.2-3）。書籍出版ビジネスの例をあげれば、相当の資本を持つ大手出版社が、各新規出版物を成功させるわけではない。逆に中小出版社が、ベストセラーを生み出し大成功を収める可能性もある（Miege 1989, p.29）。そのため、消費者ニーズに応じて市場の需要と供給による価格メカニズムの役割を主張する新古典派経済学は、目に見えない創造性を持つ文化製品を生産・流通する文化産業の行動に関する意味深い議論には、貢献できない（Hesmondhalgh 2002, p.28）。新古典派経済学に対して、文化産業論は、価格メカニズムの動きを分析するよりも企業もしくは政府の役割を中心にしてこれらの組織がどのような形態、工夫、政策で芸術者の個性や創造性が埋め込まれる文化製品の生産を促進するかに焦点を当てて考察する。

また、文化産業論が注目するもう1つの焦点は、資本と文化の複雑な関係である。書籍、音楽、映画などの文化製品は、著作者の個性や創造性などの象徴的な文化的価値を持つ点において、一般消費品とは、異なる性質を持つ。一方、文化製品は、材質・人力・不動産・時間などの生産に必要な経済的価値も有しており、一般製品と共通している部分もある（Towse 2003, pp.1-3）。加えて、ヘスマンドハルは、ある地域と時代における技術、経済、文化的文脈の中で、文化産業の発展を検討する必要があると主張する。政治経済は、文化の生産に大きな影響を与えるが、政治経済の影響を過剰に分析すると、技術や文化に関わる様々な要因を見逃す傾向にある。政治経済の政策は、ある国の商業や産業の形態を整える主要因であるが、社会・技術的な変化も文化産業に深く関係している（Hesmondhalgh 2002, p.102）。また、資本主義的生産は、資本家の利潤動機を原動力としているため、利潤追求を目的として生産活動を行うことが、社会的・文化的に承認されなければ、資本主義は、成立しない。このように資本主義は、本来、利潤追求と言う行動動機、所有権概念、生産された価値の配分に関する合意などによって、整序された人々の行動様式を前提としている（橋本 1991, pp.100-102）。つまり、文化産業の発展において、資本は、他の産業とは異なり、それぞれの地域と時代の独自の条件や形態により文化の領域へ進出する。

書籍出版ビジネスは、資本家による社会的知識を生み出して伝達するシステムである。そのため、出版資本は、利潤追求を目的とした生産活動として発達する一方で、知的・美的な情報を提

供する出版文化伝播を果たす役割を持つ。出版資本には、知的・美的な情報伝達と言う自己表現を実現する出版文化が、読者または政府に承認されなければ、検閲や損失と言う失敗が生じる。逆に利潤を追求して、社会的・文化的の規範に従い生産すると、自分の好みを自由に表現する自己表現ができなくなる。こうした矛盾において、書籍出版ビジネスは、文化的価値を支えながら、経済システムの中で様々な戦略で生き残り発展する。本稿は、こうした観点に基づき、シャムにおける書籍出版ビジネスの発展と、その発展の基礎となった出版資本と文化の関係の変遷を分析する。

### 3. シャムにおける初期の出版（1830－1850年代）

シャムの前近代文書は、現在使われている紙ではなく、扇椰子の葉（バイラン）やコーイの皮などの植物から作られた紙に文字が筆写され、タイ式本（サムットタイ）<sup>(4)</sup>と言う巻き本に装幀された。これらのタイ式本は、販売目的ではなく、手書きにより僧侶が仏教の経典を書写したり、支配層が物事を記録したりする目的で使われていた。

19世紀までのシャムにおいては、識字率が低く、庶民は、読み書きできなかったため、書籍の読み書きは、僧侶、僧籍を経験した人、支配層などの数少ない人々に限られていた。ニティは、「タイでは、古文書が存在していたが、タイ伝統的文化を見ると、タイは、識字の社会ではなかった。（中略）タイは、中国との外交の長い歴史を持つとはいえ、中国の出版技術を導入する試みはなく、記述による伝達のニーズは、非常に低かった」（Nidhi 2011, p.110）と主張した。すなわち、タイでは、文字よりも口頭により文化を伝達する社会であり、西欧技術が伝来するまでに、自ら出版文化における内部的な発展を遂げることはなかった。

印刷技術は、アユタヤ王朝のナーラーイ王の時代（Period of King Narai 1656－1688）に欧州の宣教師により初めて導入されたと推測される。F・ヒーレアー（Francois Touvenet Hilaire 1881－1968）の記録書によれば、1662年にラーノー総主教（Louis Laneau 1737－1796）がキリスト教の聖書をタイ語に翻訳し、タイ語・パリー語の文法書及びタイ語の辞書と共に木版の活字で印刷した、とアムパイは述べている（Amphai 1972, p.44）。当時の出版物は、タイ文字ではなく、ローマ字で印刷されたタイ語の本であった。ナーラーイ王は、洋式の印刷に関心を寄せ、フランスから機械を導入し、ロブプリー県に印刷所を設立する希望を持っていた（Amphai 1972, pp.44-45）。しかし、フランスへの印刷機の注文依頼の記録はあるものの、それらの印刷機がシャムに到着した記録は発見されていない。ただし、チャクリー王朝（Chakri dynasty 1782－現在）までに、欧州のカトリック教会の宣教師が、シャム国内でローマ字でタイ語の宗教書を発行し続けたと言う証拠がある（Matichon 2006, pp.7-9）。

チャクリー王朝初期におけるタイ文字での出版<sup>(5)</sup>は、ブラッドリー（Dan Beach Bradley 1804－1873）により開始された。彼は、1835年にABCFM（American Board of Commissioners of Foreign Missions）の宣教師として、キリスト教を布教する目的でシャムに派遣され、医療方法や近代的な技術や知識をシャムに初めて導入した。彼は、1835年にABCFM印刷所を創立し、1836年6月3日に最初のタイ語の出版物として『モーセの十戒』1,000部、そして、1839年4月27日にタイ政府の最初の公式文書、「アヘン禁止公報」9,000部を発行した。さらに1844年にシャムにおける最初の新聞である『バンコク・レコーダー』（Bangkok Recorder）を発行したの



で、タイにおける「出版の父」として尊敬されている。また、ブラッドリーは、キリスト教を布教する目的で『助産師』(Khampee Khantaraksa 1843) や『牛への種痘書』(Tumra Phlukfee Wuaw 1845) などの近代的医療学の書籍を聖書と一緒にシャムの庶民に配った (Amphai 1972, pp.48-64)。

しかし、印刷技術が導入されたとはいえ、出版は、シャムで急に普及するようになったわけではなかった。たとえば、『バンコク・レコーダー』は、わずか2年を経ずに1845年9月に廃刊となった。先行研究の多くの、シャム人は、識字率が低く、書籍・新聞に馴染んでいなく、支配層と官僚は欧米人が発行した新聞に反感を持っていたため、宣教師による出版を普及させることは、相当難しかったと記した (Amphai 1972, pp.60-61; Craig 1973, pp.65-67; Sukanya 1985, p.62)。

ただし、上記の先行研究が述べた要因だけでは、シャムの出版が進まなかった状況を説明できない。なぜなら、生産諸手段が整備されていないと言う経済社会的な要因にも関係がある。社会体制として、シャムの封建制(サクディナ)は、土着民が貿易や国内取引を行うことに不利な条件であり<sup>(6)</sup>、土着民による資本蓄積や労働移動の不自由は、工業の基礎となる資本主義の発展を阻害した。たとえば、当時、人材採用の困難に陥ったブラッドリーは、奴隷を使役することにした場合もあった (Donald 1969, pp.94-95)。そして経済の面から見ると、18-19世紀において絶対君主制であったシャムでは、1855年までに宮廷が、華僑を通じて貿易を独占していたため、中国との貿易が盛んであり、欧米との貿易は比較的少なかった (Amm 1982, pp.145-148)。そのため、19世紀前半のバンコクの港は、ペナンやシンガポールとは異なって、欧米商船が少なく<sup>(7)</sup>、アメリカ・イギリスからの印刷機械の仕入れや活字ができる人材の採用は、困難であった<sup>(8)</sup>。

また、商業に欠かせないインフラが整備されていなかったことも、経済的要因の1つであり、出版物の配達・支払に大きな悪影響を与えた。ブラッドリーが復刊した『バンコク・レコーダー』に、「バンコクにいるお客様には、1ヶ月2回『バンコク・レコーダー』を送付する。バンコク都外のお客様にも、恐らく送付できる。送付ができない場合は、印刷所に直接配下の者を寄こしてもらいたい」(Amphai 1972, p.93)と掲載した。1860年代のシャムでは、郵便制度が成立していないため、ブラッドリーは、自分自身で会員まで出版物を配達していたことが分かる。しかも、会員料金の徴集は、もっと難しかった。ブラッドリーの復刊『バンコク・レコーダー』は、1867年2月16日に廃刊になった<sup>(9)</sup>。アムパイは、廃刊の要因を赤字やシャム政府の不満などの理由をあげて説明した (Amphai 1972, p.94)。ただし、最後に『バンコク・レコーダー』の会員料金の未払者名を掲載し、助手に支払うように求めた。その会員料金の記録を見れば、会員102人中の支払済み者は、わずか55人であった (So Playnoi 2005, pp.94-95)<sup>(10)</sup>。

1830-1850年代のシャムにおいて、出版資本が成立できなかった要因は、先行研究が述べたようにただ読者数が少なかっただけではない。設備・労働と言う必要な生産諸手段やインフラ整備が整えられておらず、経済社会的な要因で出版資本が成立していなかったのである。要するに、貿易が一般の民間人に開放され、欧米との取引が盛んである段階の起点となるボーリング条約が締結されるまで、シャムにおける出版資本の成立は、非常に困難なことであった。

#### 4. 宣教師による出版資本の出現（1850－1880年代）

1855年にシャムがイギリスと結んだボーリング条約は、19－20世紀前半までのシャムに大きな影響を与えた。自由貿易の原則、低関税、領事館の設置と治外法権の承認などが定められ、シャムは、不平等条約ながらも近代化を本格的に推進し始めた。その結果、バンコク港での米輸出を中心としたシャムの貿易が徐々に拡大すると共に、国内の経済体制が大きく変化した<sup>(11)</sup>。このような背景で1850年代から欧米人の入国に従って、商品の輸出入、資本の流動、文化交流が進行した。むしろ、ボーリング条約の締結直後に、書籍出版が、急激に普及したわけではなかったが、資本の拡大により徐々に普及するようになった。1830年代におけるシャムでは、キリスト教を布教する宣教師が近代的出版技術を導入し、聖書などを発行したが、シャム人が受容するには、至っていない。しかし、前述したシャムの環境変化により、宣教師は、キリスト教の布教だけでなく、利潤追求の目的に合わせ、資本に基づく商業出版事業を成立させた。本節では、ブラッドリーとスミス宣教師の例をあげ、1850－1880年代の環境変化の中で、シャムの出版資本の出現を明らかにしたい。

1851年にアメリカから戻ったブラッドリー<sup>(12)</sup>のシャム滞在は、1回目の滞在時と比べ、出版目的が大きく変わった。1回目の滞在時の彼の出版物は、近代的な医療書以外には、ほとんどがキリスト教の聖書やその説明書などの宗教書であった。しかし、2回目の滞在時にブラッドリーは、教会と一般の人々の両方から出版依頼を受け、儲けた利潤を教会の事業に使った。ブラッドリーの出版目的が変わった要因は、ABCFMからAMA（American Missionary Association）教会に転入したことである。ABCFMに比べAMAの宣教師の人数や資本は、非常に少なかった（Donald 1969, pp.93-94, 128－131）。こうした予算状況のため、自前で資金を集めようとしたブラッドリーは、商業出版事業を本格に取り組み始め、AMA印刷所を設立した<sup>(13)</sup>。AMA印刷所では、教会の出版のみならず利潤追求の目的で公報、広告などの印刷や合本、翻訳、出版物の販売までに様々なサービスを提供した。AMA印刷所は、著作権を初めて購入した事例である『ロンドンの旅詩<sup>(14)</sup>』（Nirad London 1861）を始め、タイ語教科書の『ジンダーマニー』（Jinda Mani 1861）、『タイの法律』（Kodmhay Muangthai 1862）、有名な中国時代小説である『三国志』（Samkok 1863）などを、4－5パーツと言う高い値段の単行本の形で少量（200－300部）発行した（Matichon 2006, pp.15, 269-270）。

1830－1840年代のABCFM印刷所に比べ、ブラッドリーのAMA印刷所事業は、大きく拡大したが、スカンヤーは、ブラッドリーの印刷所事業は利益を得られなかったと批判している。AMA印刷所の年間収入は、4,000ドル未満であったが、作業者報酬と他の支出を引き去ると、事業利益がほぼなくなった。しかも、わずかに残った事業利益も、家族の生活費や教会経営費として使ったため、結局、ブラッドリーは、ただ「貧乏な老人」と呼ばれ、1873年に死去した（Sukanya 1985, p.62）。ただし、筆者が注目したいことは、ブラッドリー死後のAMA印刷所は、彼の2人目の妻、サーラー（Sarah Bradley）と娘のアイリーン（Irene Bradley）により、中国時代小説を中心とした書籍の出版事業を1939年までに継続したことである（So Playnoi 2005, pp.121-125, 133）。すなわち、ブラッドリーが運営したAMA印刷所の利益は、高くはないと言う評価であるが、その収入でブラッドリー夫婦と子供5人の生活費、さらに、子供のアメリカ帰国の旅費と大学の学費が支給できている（Donald 1969, p.102）。

ブラッドリーは、医療書、法律書、文法書などの近代的学術書と、支配層に読まれた『三国志』などの長編の中国時代小説などの高価な単行本を発行した。これらの書籍の値段と内容を見れば、ブラッドリーは、教育を受けていないシャム民間人ではなく、シャム人の支配層、官僚、商業人など限られた少数の読者を狙っていたことが考えられる。このような戦略を実行したブラッドリーの印刷所は、スカンヤーが批判したように成功を収めたとはいえないが、初期のシャムにおける出版資本と文化の形成に貢献したと考えられる。

スカンヤーが批判したブラッドリーに対して、スミス (Samuel John Smith 1821-1908) は、出版事業を達成した例である。1868年にブラッドリーが『バンコク・レコーダー』を廃刊した直後に、バプテスト教会の宣教師であるスミスは、教会を退会し、バーンコーレーム (Bang Kho Laem) で自営の印刷所、S. J. Smith Publisher (Rongpim Kruu Smith) を設立した。スミスは、伝統的物語や詩などのタイ語韻文原稿を収集し、大衆読者に向けた廉価のペーパーバックをタイで初めて発行し、さらに印刷機械の輸入の事業を実施した。スミスが発行したタイ語韻文の「ルーアン・ジャクジャクウォンウォン」 (Rueng Chakchak Wongwong)<sup>(15)</sup> という娯楽本 (Nhangsue Anlen) は、ブラッドリーの単行本のような品質の高い書籍より、利益をもたらした。スミスは、1冊25サタンと言う廉価のペーパーバックの形で、民間人が馴染んでいる伝統的物語を出版する戦略を実施した。その結果、シャム人は、韻文が好きであり廉価で書籍を手に入れられるため、スミス印刷所の売上は、ブラッドリーのものより成長した。ソー・フライノイは、タイ最高の詩人であるストーン・プー (Suthon Phu 1785-1855) の長編ロマン『プラ・アパイマニー』 (Phra Apaimanee) の利益だけで、新しい建物を建設できたほど、スミスは良好な経営状況を実現できたと主張している (So Playnoi 2005, pp.143-148)。

もっとも注目すべきことは、当時識字率の低かったシャムにおいても、読み書きできない人々が、読者として出版活動に参入する現象が発生したことである。プラヤー・アヌマーンラーチャトンによれば、流行っていた娯楽本の多くの読者は、土着民の子供と女性である。1880年代には、読み書きできる民間人は多くなく、とりわけ、女性の識字率は非常に低かった。それにもかかわらず、識字できない民間人には、読み聞かせることで、娯楽本を楽しむこともできた。出家した男や学校に通った子供たちなどの少数の読字できる人々が、読字できない人々に対して娯楽本を読み聞かせることで、お菓子、おもちゃ、お金などわずかな報酬を得る文化が生まれた (Anumanrachaton 1970, pp.2-3)。そのため、識字率が低かった19世紀末のシャムにおいても、こうした読書文化は、スミスによる出版資本の発展を支えたのであろう。

しかも、19世紀末における社会・経済的環境の発展は、流通の改善・書籍市場の形成にもつながっている。スミスが発行した日刊新聞のタイ語版である『シャム・サマイ』 (Chodmhaihed Siamsamai 1882-1886) の事例を見ると、スミスは、新聞を決められた場所に配達すること<sup>(16)</sup>、郵便での送付サービス、割引販売戦略などの販売戦略を策定した。『シャム・サマイ』の裏面の広告によれば、「書籍販売所を設立するなどの大量販売するお客様は、120バーツまでの本を買えば100バーツに値下げ致します。これに達しなければ、それぞれの書籍の定価で卸売させていただきます」と卸売販売を行った (『シャム・サマイ』, 2, 22, 1)。上記のように1880年代のシャムでは、社会・経済的環境が改善され資本主義の発展に必要な生産諸手段やインフラ整備が徐々に成立し、ブラッドリーの時代とは異なっていることは、明らかである。

また、スミスがシャムの民間人に印刷技術を伝達した貢献もあった。シャムの初期の民間知識人であるコーソーロー・クラブ（KSR. Kularb）は、スミスの印刷所で書籍印刷注文や記事投稿などの出版・編集を通じて、印刷技術を習得したうえで、それらの経験を活かし、自分の印刷所を設立した（Boonpisit 2013, pp.51-52）。さらにスミスの印刷所は、タイの有名な物語、クンチャーン・クンペーン（Khun Chang Khun Phaen）を出版したことにより、道德犯罪で訴えられたため、1887年にシャム民間人のテープに印刷機械を売渡し閉業した。スミスの印刷機械を引き取ったテープは、1890年にテープの印刷所（Rongpim Nai Thep）を設立した。浮き家上で出版事業を開始したテープは、スミスと同様にタイ式の娯楽本に基づく廉価なペーパーバックを販売する戦略でかなりの利益を得、その後ジャルン・クルン通り（Charoen Krung Road）の商業街に引っ越した（Matichon 2006, pp.270-271）。すなわち、シャムの民間人による書籍出版の発展は、スミスのような欧米宣教師とシャム人における技術移転と文化交流の成果であろう。

上記のブラッドリーとスミスの例に示されるように、シャムの経済・社会・文化的環境の変化に従って、出版資本が1850-1880年代に徐々に出現し始めたと言える。1850年代のブラッドリーの1回目の滞在と比較すると、2回目の滞在は、自由貿易の拡大に伴い1880年代までに生産諸手段の導入、市場の形成及び流通の改善などが徐々に進められた。そこで、1860年代におけるブラッドリーは、学問書に関心を寄せる少数の知識人や支配層の読者に向けて、品質の高い単行本を出版する戦略を実施した。ブラッドリーによる『ジンダーマニー』、『タイの法律』、『三国志』などの優れた書籍は、現代においては高価な古典本として評価されているが、当時も、売れやすい出版物とは言えなかった。ブラッドリーとは違い、1870-1880年代において出版事業を経営したスミスは、市場の拡大と郵便制度の成立と共に、大衆読者に応える伝統的な韻文の娯楽本を発行した。その結果、スミスの生産が容易で廉価なペーパーバックは、大成功を収めた。前近代のシャムは、ニティが前述した口頭により文化を伝達する社会であり、出版文化は、内部的な発展をしなかった。しかし、シャムの近代化が進むにつれて、生産諸手段の導入や流通制度の整備と共に、スミスのような資本家は、市場が求める韻文と言う伝統的な文化を製品化できた。こうした環境の変化と資本家の活躍により、書籍出版資本が成立できたと考えられる。

## 5. シャム人による出版資本の初期（1880-1910年代）

アムパイ、スカンヤーによれば、シャムの書籍出版の初期において支配層は、書籍出版の発展に重要な役割を果たした。シャム人による出版は、ラーマ4世王（King Mongkut 1851-1868）として即位したモンクット親王により、公告媒体として発展し、ラーマ5世王（King Chulalongkorn 1868-1910）が、出版に関心を持ったことで徐々に推進された。さらに文才に優れたことで知られているラーマ6世王（King Vajiravudh 1910-1925）の時代には、出版がもっとも文化的に繁栄していたことは、現在のタイ社会で広く知られているところである（Amphai 1972, pp.64, 106, 155; Sukanya 1977, pp.3-5）。

ラーマ4世王となるモンクット親王は、キリスト教を布教した宣教師に対して、仏教書やタイ式の知識を広める目的で、1840年代にシャム人による最初の印刷所であるワット・ボーウォーンニウェート印刷所（Rongpim Wat Bowonniwet）を設立した<sup>(17)</sup>。そして、ラーマ4世王に即位した後に、モンクット王は、王宮内で印刷所を設立し、その印刷所を国王の布告を掲載する『王室官報』



(Rachakij Janubeksa) などの出版物を発行する目的で運営した (Amphai 1972, pp.64-65, 74-76)。

また、ラーマ5世王の時代において、欧州に留学して帰ってきた親王たちは、出版活動に参加し、シャム人の出版活動が徐々に発展していった。カセームサン・ソーパーク親王 (Kasemsan Sopak 1856-1924) による週刊新聞の『ダルノーワート』 (Darunowat 1874-1875)、パースランシー・サワーンウォン親王 (Bhanurangsi Savangwongse 1859-1928) による日刊新聞の『コート』 (Court 1875-1876) などの定期出版物が発行された (Sukanya 1977, pp.3-4)。これらの新聞は、広告がほとんど掲載されておらず、王室の情報普及や知識啓蒙の目的で支配層たちの間でのみ流通した。しかし、支配層たちは、国の運営で忙しくなり、出版活動をする暇がなくなったため、これらの発行紙は、短い期間で廃刊となった (Sukanya 1977, p.41)。

前述したように、書籍の出版は、1830年代から宣教師によりシャムに導入され、数少ないシャムの支配層のみに受け入れられたことは、明らかである。しかし、ブラッドリーとスミスの出版をきっかけに、政治・社会・経済的変化もあって、出版技術・文化を受容する民間人が徐々に増加した。その結果、19世紀終盤から20世紀初頭にかけて民間人の出版事業がようやく出現した。

19世紀末において、バンコクにおける経済社会的環境は、大幅に変化した。住宅街がバンコクの北・東・南へ徐々に広がり、ジャルン・クルン通り、バムルン・ムアン通り (Bamrung Mueang Road)、フェアン・ナコン通り (Fueang Nakhon Road) などの道路が整備された。従来のシャムは、水上交通で移動していたが、道路の拡大に伴い馬車などの陸上交通へ交通手段が徐々に変化した。さらに、ペナンとシンガポールには、既に多く見られた多目的の「ショッピングハウス」(ホーンテワ) がそれらの道路に沿って設立され、シャム民間人と外国人は、商業を営むためにその店屋を借りることができた。こうした環境の変化によってバンコクでは、日常品、服装、宝石、機械などの商売が市内の通りにおいて盛んになり、様々な市場が形成された (Nangnoi 1992, pp.194-251)。さらにシャムの貿易量は、1880年の2,674万バーツから1910年の1億7,712万バーツへと増加を見せた (James 1971, pp.332-335)。

とりわけ1880年代に郵便局の成立、欧米商店や市場の拡大などにより書籍出版だけではなく、全体的に商業を進める経済環境が整備された。1881年にシャムの郵便局が設立され、2年後に電報サービス提供を開始し、郵便電報局に改称され、1885年には、万国郵便連合に加盟した。初期の郵便電報局は、陸上道路が不足していたため、船により配送サービスを提供したが、鉄道が設立された後1900年に鉄道による配送サービスを提供し、1905年に駅沿いに地方郵便局を徐々に拡大していった<sup>(18)</sup>。

このような国内経済発展においてシャム民間人は、貿易拡大と共に外国人が設立した企業や商店で従業員として勤め、資本を蓄積できた。その資本をもとに、コーソーロー・グループの印刷所やワット・コ印刷所の例に見るような、小規模な印刷所を設立し、書籍や定期発行紙などの出版物の発行が始まった。

コーソーロー・グループ (KSR. Kularb, Kularb Kritsananon 1834-1921) は、ティエンワン (Tian Wannapo 1842-1915)<sup>(19)</sup> に並ぶ19世紀におけるシャムの代表的な民間知識人である。彼は、民間人による最初の雑誌である『シャム・プラベート』 (1897-1899) を発行し、この雑誌は、歴史に関する出版物として評価された<sup>(20)</sup>。グループは、自らシャムキット・パーニットチャリアン印刷所 (Rongpim Siamkij Panidchareon) をワット・ラーチャボピット (Wat Ratchabophit) のフェアン・

ナコン通りに沿った建物に設立し、従業員4人で小規模な印刷所を運営した (Mananya 1982, pp.31-32)。ブンピスットによれば、グループは、欧米人の商売会社と書記として勤め、シンガポール、スマトラ、マニラ、香港、中国、インドなどの様々な港町に出張した。こうした背景から彼は、欧米式の発展した港町を体験し、知識、財産及び歴史資料を集めた。バンコク創立100周年記念式典が開催された1882年にグループは、記念式典の17番号室で書籍展示室の担当者に任命され、自分が収集した書籍150点を展示室に展示した。100周年記念式典の後、グループは、本格的に出版事業に参入した (Boonpisit 2013, p.51)。グループの出版物は、年代記や有名人の伝記などの歴史に関するものがもっとも多かった。歴史に関する知識に馴染みがなかった当時のシャムにおいて、グループの歴史に関する出版物は、重要な著作物と評価された。しかし、彼は、勝手に修正した内容を書き込んだと言う理由で支配層から激しく批判された。

グループの代表作である『シャム・プラペート』は、定期発行紙であり、本研究の対象物ではないが、グループの経営方法が『シャム・プラペープ』に反映されており、当時の出版事業をよく表していることから本稿で取り上げる。1897年に12月に月刊紙『シャム・プラペート』第1巻1号は、グループの編集により「ワッチャリン印刷所」(Rongpim Watcharin)<sup>(21)</sup>で1,500部刊行され、評判の良い定期発行紙となった。『シャム・プラペート』は、50-80ページで年間料金12冊6パーツ、小売1冊1パーツの値段が設定された。『シャム・プラペート』には、グループの出版物の広告が掲載されたが、『シャム・プラペート』を含め、すべての出版物をバンコク市内の新聞屋で注文することができた。『シャム・プラペート』は、歴史、有名人の伝記、ニュース、編集者への質問・応答、広告が掲載され、編集者の皮肉な意見や庶民の想像さえない意見がよく載ったため、発行初期においては非常に人気があった。『シャム・プラペート』の読者は、ただバンコクだけではなく、地方や外国にも会員が存在したことから、タイ語出版物の市場が拡大したことが分かる。さらに1年目には、月刊紙として平均1,500部が発行され、2年目に入ると半月刊紙1,500部と発行頻度を増加した。グループの前書きによれば、1年目には、会員総数が約1,350人で、バンコク市内500人、地方800人、さらに欧米などの外国に滞在する50人が存在した。ただし、グループの印刷所は、生産の問題が生じなかったわけではない。もっとも困難な問題は、送金の紛失や未払いなど、会員の送金であった (『シャム・プラペート』1898. 1. 7. i, 1898. 1. 12. 511, 1899. 2. 13)。

グループ印刷所の他に、当時民間人が活躍した注目すべき印刷所は、ワット・コ印刷所である。ワット・コ印刷所は、本名がラートジャリアン印刷所 (Rongpim Rachachreon) であるが、ワット・コ (ワット・サムパンタウォン) の近くにあるため、ワット・コ印刷所と呼ばれ、出版物の表紙にも「ワット・コ印刷所」(Rongpim Watko) と言う店名を掲載した。創立者は、シン (Sing)<sup>(22)</sup>であり、彼は、シンブリー県出身で、就職を求め若い頃にバンコクに移り住んだ。シンは、最初にメートーン硝子館 (Ran meathong) に勤めていたが、メートーンの後継者がいなかったため、メートーンが死去した後、シンは、硝子館の事業を相続した。2-3年後にシンは、硝子館の事業の拡大を目指し、スミス印刷所の書籍を仕入れて、硝子館で書籍を売り始めた。スミスの印刷所が閉店した後に、シンは、1889年にスミスが刊行し残った書籍を購入して、ワット・コ印刷所を設立して出版物を刊行した。初期には、手動式の活版印刷機と断裁機といった2つの機械で出版活動を実施した<sup>(23)</sup>。19世紀の末においてワット・コ印刷所のように、サパーンハ

ン (Saphan Han)、サムペーン (Sampheng) からジャルン・クルン通りにかけて、スリ印刷所 (Rongpim Suree) やパーニット・スパポン印刷所 (Rongpim Panitsupapon) などのシャム人による小規模な印刷所が徐々に立ち上がった (Matichon 2006, pp.24, 28-33)。これらの小規模な印刷所は、バンコクの欧米人商店から手動式の活版印刷機を導入し、4-5 人の作業で 200-300 部の小規模なタイ式娯楽本を発行し出版事業を行ったものと推測される。

ワット・コ印刷所による代表作は、スミスと同じくタイ式娯楽本である。さらに、ワット・コ印刷所の書籍の特徴は、表紙に独特な覚えやすい広告詩が書かれたことである。アネークによれば、ワット・コ印刷所の書籍は、スミスと同じ 1 サルン (25 サタン) の定価で販売されていたが、「1 冊は、1 サルンである、お客様。ワット・コの書籍は、非常に甘い響きだ<sup>(24)</sup>」と言う広告詩が掲載されており、この広告詩がワット・コ印刷所の特徴であるといえよう。ワット・コ印刷所は、小規模な印刷所にも関わらず、1960 年代まで事業を長く継続した。シンが 1909 年に死去した後で、妻のトーンカム (Thongkham) が事業を相続した。トーンカムの時代には、作業員数が 10 人に増え、印刷所の建物を拡張し、新しい印刷機を導入した。出版物は、多色印刷技術を導入し、さらにページ数の増加により 6 サルンから 2 パーツまでの書籍へと多様化した。ただし、20 世紀後半に入ると、ワット・コ印刷所が多く発行していたタイ式の伝統的な物語や詩の人氣が、バンコク市場で衰え始めた。バンコク市場では、近代的な小説などの散文が流行って来た。一方で、ストーリーが長たらしく古臭い言葉ばかりの伝統的娯楽本の評判は、悪くなった。そのため、後期のワット・コ印刷所は、バンコクではなく、近代的な生活と散文に馴染んでいない地方の人々を読者とする方針に変更した。しかし、物流に必要な全国の道路と鉄道が各地に整備されていなかったため、書籍は、中国人商人を通じて船で配送された。戦前においては、中国人の商人たちは、ワット・コ印刷所の大量の書籍を卸で購入し、川沿いに船を漕いで、地方で小売した。当時の流通マージンは、100 部 6 パーツであり、かなり大きな金額であった。さらに書籍市場の規模は、地方間で差があった。売り上げの 1 番多かったのは、南部、特にナコーンシータンマラート県であり、次は、中部、北部であった。売り上げが 1 番低かったのは、東北部であった。しかも、地方の書籍市場は、農業の収穫に従って需要変動があった。米の値段が上がると、店員の食事時間がなかったほど 1 日中書籍がよく売れた。1 部 1 サルンの値段の本に対して、20-30 パーツ分も購入した商人もいた。そして、船商人は、本の販売が 1 番よい時期が収穫時期であることをよく認識していた (Anek 1996, pp.23, 34-36)。

このようなエピソードから見ると、支配層による啓蒙的出版だけが 19 世紀におけるシャムの出版を急に発展させたとは言い難い。支配層による公的印刷所は、利潤追求の目的ではないので、スミスに比べて作業効率、開発能力の低かったことは想像に難くない。ラーマ 4 世王によるアクソーン・ピムマーカーン印刷所 (Rongpim Aksorn Pimmakan) の主な作業は、『王室官報』と様々な公布書の出版であったが、宮廷の印刷所は、専門家と労働者の不足、低い作業効率、さらに、損失などの問題を 33 年間に抱えて、1891 年に事業を閉鎖した (Matichon 2006, p.22)。また、その後成立したワチラヤーン図書館は、『ワチラヤーン・ウィセート』(Wachirayan Wiset 1884-1915) などの定期発行紙を始め、支配層による啓蒙的書籍を発行した。しかし、様々な問題に陥ったあげく、ワチラヤーン図書館の出版事業は、郵便局の印刷所や、官僚が運営した印刷所などに印刷所作業を依頼し、同図書館は、原稿のみを担当したと言う記録もある (Kammasumpatikasapa 1891, pp.137-139)。



## 6. 戦前における出版資本の発展 (1910-1930 年代)

1910-1930 年代においてシャムの出版市場は、大幅に拡大した。スカンヤーによれば、雑誌の総合点数が、ラーマ4世時代の6点とラーマ5世時代の47点に対し、ラーマ6世時代には、127点と増加を見せており、出版物が多様化したことがうかがえる (Sukanya 1977, p.102)。このような書籍市場の拡大は、ラーマ6世王の貢献や民衆主義的運動が主な要因となっていると見る先行研究が多い (Amphai 1972; Chusri 1975; Sukanya 1988; Matichon 2006)。しかし、これまでの先行研究は、20世紀初期における経済・社会・文化・技術の変化により、バンコクに中流階級が台頭したことや、異文化的出版の影響があったことを見逃している。本稿では、民間人の読者数が伸びるにつれて、出版物の市場は、1910年代から継続的に拡大したことに注目する。

前述したようにボーリング条約が締結された1855年から、シャムは、自由貿易の拡大と政府による近代化改革が行われた。その結果、下級官僚や商人などバンコク市内を中心に中流階級が徐々に増えた。経済成長及び1890年代の官僚制の改革に伴い、外務省、国防省、内務省などの政府機関では、官僚の求人が増加した。1900年代には、被支配者層の拘束や奴隷制が廃止され、学校教育、官僚組織に加わる民間人の人数は拡大した。特に1910年代に義務教育制度が定められたことにより、学生数は、急激に増加した<sup>(25)</sup>。このように近代化されたシャムでは、バンコクを中心に中流階級の人数が増加した。所得の増加による経済的余裕と余暇時間を持った中流階級は、著者と読者の両方の立場で、レジャーとしての出版活動に参入した。そのため、中級階級の台頭は、20世紀初期における書籍出版市場の拡大の要因の1つであろう。

また、出版の拡大におけるもう1つの要因は、技術発展である。シャムは、1940年代まで国内で印刷機械を製造していなかったものの、世界的には、手動式機械から電動式機械に転換しており、シャムでも、電動式機械を輸入したことにより印刷の生産性を向上させた。スミスやワット・コによる書籍の出版部数は、平均500部であったが、19世紀末における出版部数は、平均2,000部に急激に増加し、1920年代には、平均1万部まで伸びた大衆雑誌や教科書などの大量出版が現れた。こうした印刷の生産性の向上は、1900年代から徐々に発電所が設立されたことも影響している。1901年からオランダ人が運営したシャム電気会社 (Siam Electricity Company) は、市街の電球、都電などの公的設備に電力を提供する発電所を設立し始めた (Wright 1994, pp.188-192)。その後、電気供給は、公的目的だけではなく、生活、販売、家庭生産などの私的電力消費にまで拡大した。1920年代においては、政府によって電動式印刷機械が導入され、教科書、政府の布告などの大量出版が現れた<sup>(26)</sup>。さらに19世紀においては、輸入していた金属活字は、1930年代には華人やシャム人が小さな作業場で簡単に鋳造できるようになった<sup>(27)</sup>。

こうした教育普及と技術発展に伴い、スミスやワット・コ印刷所とは異なり、教科書などの大量の出版物を発行できる印刷所が誕生した。19世紀末からシャムの支配層だけではなく、中下級官僚や華人も、書籍出版市場に投資した。当時支配層と密接な関係を結んでいた中下級官僚は、教科書、公的広告などの政府の要求に応えるために、比較的大規模な印刷所を設立した。中下級官僚による代表的印刷所は、バムルンヌクーンキット印刷所 (Romgim Bumrongnukulkitch)<sup>(28)</sup>、ソーポンピパット・タナコーン印刷所 (Rongpim Saponpipattanakul)<sup>(29)</sup>、タイ印刷所<sup>(30)</sup> (Rongpim Thai)、アクソーラニット印刷所 (Rongpim Aksoranit) などである。本節では、アクソーラニット印刷所の事業を例として書籍出版の発展を考察する<sup>(31)</sup>。



アクソーラニット印刷所の創立者は、プラ・シリアイサワン (Siriaisawan) である。1893 年まで中級官僚として財務省で務めた彼は、19 世紀末に 30 万バートの投資金により、ワン・バンクンプロム (Bang Khunphrom palace) でアクソーラニット印刷所を設立した。プラ・シリアイサワンは、そこで出版事業のみならず、読み書きや彫刻などの専門知識を教える学校を運営した (Wright 1994, p.260)。さらに印刷所の他に、プラ・シリアイサワンは、衛生管理、製綿工場、皮革工場、製材工場、米粉屋などの幅広い商業を発展させた (So playnoi 2005, pp.63-65)。

1890-1920 年代におけるアクソーラニット印刷所は、教育省の注文を受け、平均 1-2 万部という大量出版の教科書を発行した。アクソーラニット印刷所の書籍リストによれば、100 点以上の教科書のタイトルが掲載され、『速習タイ語教科書』(Beabreirew) など 10 回以上再版したものもある (タイ国立公文書, So.To. 9/47, 3-7)。さらに同社は、10 万部ほどの大量教科書である『速習タイ語教科書・第 2』(Beabreirew Lemsong 1912) を発行したこともある。こうした大量の教科書の受注を手にした背景には、20 世紀初期において教育省が教科書の出版と販売に関して、アクソーラニット印刷所とのみ販売契約を締結したことがあげられる (タイ国立公文書館, So.To. 9/1, 1, 9)。しかし、1920 年代以降には、教科書独占の解消<sup>(32)</sup>と 1930 年代教科書改革<sup>(33)</sup>のため、アクソーラニット印刷所による教科書が著しく減少した。その後、激しい用紙不足状態となった 1940 年代までに、クラブ・サーイプラディット (Kulap Saipradit 1905-1974)、マラーイ・チュウピニット (Malai Chupinit 1906-1963)、ソット・グーラマローヒット (Sod Kurmarohit 1908-1978) などの民主主義を主張した作家たちは、アクソーラニット印刷所から『プラチャーミット・スパーブブルット』、『エークカチョン』、『スアンアクソン』、『シンラピン』などの定期出版物と書籍を出版し活躍した (So Playnoi 2005, p.67)。

アクソーラニット印刷所を始め、バムルンヌクーンキット印刷所、ソーボンピパット・タナコーン印刷所などの中下級官僚による印刷所は、20 世紀初期に誕生した。これらの中下級官僚の印刷所は、政府と親密な関係を通じて、政府の布告、教育省の教科書、ワチラヤーン図書館の書籍、支配層・官僚の葬式本などの印刷依頼を受けた。さらに、大規模な印刷所と共に、民間人や華人による中小規模な印刷所も、いくつか設立された。このような印刷所が設立されたことで、19 世紀の状況と異なり、自分の印刷所を設立するほどの資本を持っていない民間人でも、フェアン・ナコン通り、ジャルン・クルン通り、バムルン・ムアン通りなどに集中していた印刷所で出版活動に参入できる道が開けるようになった。このように出版資本が進出するにつれて、出版文化が徐々に花開き、1930 年代に書籍市場と書籍出版ビジネスが発展するに至った。

上記の社会・経済・政治・技術的環境の変化により、1920-1930 年代における書籍市場・書籍出版の発展について、ソー・ブンサヌアアが次に述べている。即ち、1924 年以降は、タイ語の短編・長編の娯楽本が一時期に流行した。当時の書籍のページ数は、4 ナーヨック (64 ページ) から 6 ナーヨック (96 ページ) まであり、15-20 サタンで販売されていた。印刷費用は、1,000 部で紙仕入、金型、活字、印刷料金などを含めると、13 バーツ/16 ページである。次の 1,000 部の印刷料金は、活字費用が不要となるので安くなるが、当時の販売見込みでは、1,000 部の出版数が適当であった。当時の書籍の生産者は、出版社 (サムナックピム) という呼び方ではなく、「翻訳会」(カナ・ルアムカーンプレア)、「紳士会」(カナ・スパーブブルット) などの会 (カナ) と呼ばれた。また、当時の出版社と言う様々な出版会は、原稿を書き、本を発行するだ

けではなかった。たとえば、翻訳会は、娯楽本の販売だけではなく、翻訳、執筆の手伝、校正、手紙・電報の手伝、広告などの執筆業務も提供した。さらに、娯楽本ブームをきっかけに販売店も、娯楽本を発行して利益を得た。当時の書店とは、多種類の商品を販売する雑貨店であった。現在と異なり、書籍からの利益が少ないため、書籍の専門店を統一的に運営する書店は、見られなかった。さらに書籍の展示方法は、棚に本をきれいに陳列して販売する現代とは違い、本をバインダークリップに挟み、縄などに結んでつり下げる方式であった。配本は、現在とは異なり取次が誕生していないため、自分で馬車や路面電車で運び、市場、商店街、住宅街、都電停、劇場や映画館の前などにある雑貨店に配達した。小売販売は、雑貨店が販売見込みにより本を仕入れ、売れた書籍定価の2割をマージンとして雑貨店が得た (So Bunsaner 1989, pp.31-36)。

さらに、ソー・ブンサヌアーが述べたように、出版文化においては、1920-1930年代に、近代的な散文洋式の娯楽本のブームが台頭した。1920年代に新聞に連載された中国や英語の翻訳小説が流行したことは、シャムの民間人が伝統的な韻文から徐々に脱して、ようやく散文様式に馴染んできたことを示している。プラーヤー・アヌマーンラーチャトンによれば、有名な新聞である『シャム・ラート』(Siam Rat 1920-1925)は、経営戦略として中国語から翻訳した小説を新聞に連載し始め、非常に良い評判を得たため、その後、他の新聞も中国外国語から翻訳した短編・長編を必ず掲載するに至った (Anumanrachaton 1970, pp.68-69)。また、ルアン・サーラーヌプラパン (Luang Saranupraphan 1896-1954) の『サーラーヌクーン』(Salanukoon 1925-1929)や、紳士会の『紳士』(Supabburut; 1929-1930)などの娯楽小説の雑誌が20世紀前半における代表的な定期出版物であった。『黒絹』(Prea Dum 1925)、『お化け顔』(Nha Phee 1925)、『プーチャン・シプティット』(Phuchana Sibtid 1935)などこれらの雑誌に掲載され良い評判を受けた作品は、後に書籍として編集・発行された例が多かった。こうした短編長編の娯楽本は、1920-30年代における出版文化が花開いたことの証左である。

ただし、戦前における書籍出版ビジネスは、上記のように比較的發展したにもかかわらず、出版企業の経営は、資本家と仲買人の力に依存していた。当時徐々に誕生した中小規模な出版企業や出版会は、出版文化を活発に形成したが、資金量の不安定により1-2年間と言う短い期間で撤退するものが多かった。中流階級の作家としての紳士会は、代表的『紳士』を2,000-5,000部に発行し、非常に高い人気を得たものの、地方で販売した本の代金を回収できず、わずか2年で廃刊となった。紳士会の他に、ルアン・サーラーヌプラパンの「サーラーヌプラパン会」、ウドム出版・販売社 (Samnakpim Jummay Udom)、芸術者会 (Jakkawat Sinlapin) などの数えきれない中小出版会が誕生したが、すぐに解散した事例が多くあった。芸術者会の作家、ソット・ゲーラマノーヒットは、当時資本家と仲買人が市場を支配しているため、芸術者が作った文化製品は、市場へ新規参入しにくいと述べた (Sod 1971, pp.20-21)。ソットのように20世紀前半において、報酬が少な過ぎるため、職業としては成立していない作家たちには、義務教育を卒業した下級官吏や商店の従業員上がりが多かった。これらの中流階級の作家は、十分な資本や商人・上流階級との関係を持たずに、個人の志向で書籍出版に参入した背景を持つ者が多かった。信用を欠く彼らは、アクソーラニット印刷所を所有する資本家や官僚との関係を結ばなければ、用紙・印刷の料金を事前に支払うことが必要であった。しかし、専門書店や取次が誕生していない20世紀前半のシャムでは、書籍を配本し売れ行きが良かったとしても、販売本の代金を回収する権利

を持つのは、仲買人であった。そのため、仲買人に回収した代金を急いで送金させるだけの力を持たない小規模な出版企業は、資金量の不安定な状況に陥る結果となった。

このような書籍市場の不自由さの背景には、書籍の流通制度の未整備がある。書籍出版ビジネスは、大手印刷所が集中しているバンコク市内から、地方へ書籍を流通する形態が成立した。しかし、ワット・コ印刷所の配本の例に見たように20世紀初期においては、華人による伝統的配本は、船で中部地域の川沿いに船により運ぶレートであった。このような船での流通は、限れた中部と南部までにしか展開できなかった。1900年代に整備された郵便制度の送付サービスは、地方・外国の読者にまで書籍を送付でき、重要な機能を果たしたものの、決まった送り先に限られ、地方にある一般市場に大量に展開するには役立たなかった。また1930年代に全国に拡大した鉄道は、書籍の流通に影響を与えたが、地方の駅から市場へ運送するには、仲買人の力が必要であった。そのため、前述した地方の仲買人と親密な関係を持たない中流階級の中小出版社は、バンコク市場の売上だけでは足りないため、資金量の不安定の状況に陥りやすく、短い期間で撤退せざるを得なかったことが考えられる。要するに、出版資本が進出するに従って、出版文化が徐々に花開いた戦前におけるシャムの書籍出版ビジネスの発展は、バンコク市内だけ限られていた。さらに、書籍出版ビジネスの発展は、1940年代に勃発した第2次世界大戦による激しい用紙不足状況の影響を受け、一時的に停止した。そのため、地方への書籍流通の課題は戦後に残った。

## 7. まとめ

先行研究が述べた政治的観点からの想像共同体・公共圏の成立や支配層と知識人による啓蒙的思想の伝播を目的とした出版だけでは、戦前におけるシャムの書籍出版ビジネスの発展を説明できない。先行研究の観点では、政治・経済・文化・技術的变化による出版資本と文化の関係の変遷を見逃しまう。ボーリング条約が締結された1855年から欧米の投資、技術、知識、文化などが導入されたシャムでは、自由貿易、官僚制度、教育制度、郵便制度などの政治・経済・社会的体制が徐々に設立した。欧米の宣教師が出版を導入した後、このような環境変化と共にシャムの支配層と民間人は、次々に出版活動に参入し様々な出版文化を形成した。その結果、シャムの書籍出版ビジネスは、出版資本と文化の変遷により発展した。

シャムの支配層は、非営利の啓蒙的出版としてタイ式の詩、欧米式の散文、歴史書などの代表的出版物を発行し、シャムの書籍出版に貢献したことは、間違いない。ただし、出版活動は、資本、設備、労働などの生産諸手段を用いるため、数少ない支配層に読まれた書籍出版活動には、生産の問題が絶えず発生した。ワチラヤーン図書館などの支配層による書籍出版は、戦前におけるシャムの重要な文化として評価されるが、実際にそれらの出版物の生産・流通は、中下級官僚・華人の力に依存した。そのため、支配層の貢献だけで、戦前におけるシャムの書籍出版を発展させたとは言い難い。

一方、民間人による利潤追求と自己表現のバランスをとる書籍出版ビジネスは、20世紀初期において1万部ほどの大量出版物を発行できる大手印刷所が設立され、タイ語散文の小説などの出版文化が形成された。支配層と異なり、宣教師と民間人は、政治、経済、社会、文化、技術の変化に伴い、出版事業を経済システムとして生き残らせるように、様々な戦略で職業として書籍を発行した。とりわけ1920年代に所得の増加と教育の普及により増加した民間人は、出版文化と書籍市場を形成しながら、職業として書籍出版の発展を支えた。要するに、前述した宣教師と

民間人による出版企業は、シャムの経済的・文化的な条件を満たしたうえで、出版資本と文化を成立させ、20世紀の書籍出版ビジネスの発展に役立った。

ただし、戦前におけるシャムの書籍出版ビジネスは、発展し始めたとはいえ、少数の大手印刷所を除けば、出版文化を形成する多様な出版企業は、家庭内生産活動的な小規模なものであり、短期間に経営不安定で撤退した場合が多かった。この問題の背景としては、書籍市場と流通制度の不整備が影響している。すなわち、専門書店と取次が誕生しない限り、戦前におけるシャムの書籍出版ビジネスは、ただバンコクの市場での展開に限られていた。全国的経済成長と道路整備が始まった戦後のタイにおいて、書籍出版も大きな影響を受けた。そのため、今後の課題は、戦後の経済高度成長を背景として、出版文化と出版資本の関係がどのように変遷し、書籍出版産業がどのように発展したかを明らかにすることである。

(受理日 2018年10月31日)

(掲載許可日 2019年1月26日)

---

## 注 記

- (1) ボーリング条約 (Bowring Treaty) は、1855年4月18日にシャムがイギリスの全権代表であるボーリング (John Bowring 1792-1872) と締結した最初の修好通商条約である。自由貿易の原則、低関税、領事館の設置と治外法権の承認などが定められたため、シャムに対して不平等条約であった。しかし、ボーリング条約の締結した後、シャムは、政治・経済制の改革などの近代化に本格的に推進し始めた。
- (2) ボーリング条約が結ばれた後、シャムは欧米からの影響を受けた。第2次世界大戦まで シャムの支配層と一般平民の知識人は、共に議会制度、官僚制、技術、文化などの欧米的文明化を求めた。しかしトンチャイは、シャムの文明化は、欧米の発展そのものとは異なる文化交流的過程であると主張し、欧米の思想や慣習がシャムの文脈に交じり合いながら伝達されて、シャム的な文明化が進行されたと議論した (Thongchai 2000, pp.528-529)。
- (3) ただし、戦前のシャムでは、雑誌と書籍は区別されていなかった。たとえば、週刊・月刊の定期出版物に「書籍」(Nhangsue) と名付けた場合がいくつかあり、当時の書籍と雑誌とは、分離が困難なほど深い関係で結ばれている。そのため、本研究は、書籍を中心に分析するが、書籍出版市場・商業に雑誌が大きく影響したケースを含めて議論する。
- (4) タイ式本 (サムットタイ) は、20-40 ページの巻き紙の形で文字が筆写されるものである。大きさは、大サイズ 21-30 × 70 センチ以上、中サイズ 11-20 × 34-70 センチ、小サイズ 6-10 × 20-34 センチである (Chusri 1975, pp.30-31)。
- (5) タイ文字の活字が初めて製作されたのは、シャム国内ではなかった。アメリカ宣教師の ジャドソン (Adoniram Judson) と妻、アーン (Ann Hazeltine Judson) は、1813年にビルマーに駐在し、1816年にタイ語の活字と木製印刷機によりタイ語版の宗教書を印刷し、タイ人捕虜たちに配布した。しかし、ビルマーの政治混乱によりアメリカ宣教師が、インドのコルカタ (Kolkata) に避難し、この最初のタイ文字活字もコルカタに移動された。その後、イギリスの宣教師が、シンガポールにタイ文字などの様々な活字をコルカタから購入し、キリスト教の伝道の目的として印刷所を設立した。ブラッドリーは、シャムに来る



前に、1835年にシンガポールに到着し、ロンドン宣教師教会 (London Missionary Society) から木・石製式印刷機と、アーンが使ったタイ語の活字を入手し、シャムに導入した (Matichon 2006, pp.9-10)。

- (6) シャムの封建制では、領内のすべての土地は、支配層たる領主 (チャオ) と貴族 (クンナーン) の所有物であり、土着民は、被支配層 (プライ) と奴隷 (タート) と言う社会地位に置かれた。被支配層は、支配層の管理下に置かれ、労働や納税の義務があった。このような条件の下では、支配層は、労働不足問題を解決でき、シャム社会の安定の支えになった反面、土着民は、職業選択や移動の自由を欠く状況に陥った (Chatthip&Suthii 1982, pp.184-192)。
- (7) 1844年1月11日にエキスパートと言う大型船舶がバンコクのチャオプラヤ川に初めて入ってきた (タイ国立図書館 1963, p.301)。
- (8) ラーマ4世王に即位前のモンクット親王 (King Mongkut: 1851-1868) は、1848年11月18日に印刷機械をシャムに輸入した際に、アメリカ人の知り合いに手書きの手紙で注文し、アメリカからシンガポール港に華僑のエージェントを通じて、輸入する搬送ルートを利用した (Amphai 1972, p.66-71)。
- (9) 『バンコク・レコーダー』は、1845年に絶版になったが、1865年にブラッドリーは、出版を再開した。しかし、2度目の『バンコク・レコーダー』も、2年間と言うわずかな期間でまた廃刊となった。
- (10) 階層別支払状態は、支配層は支払済5人未支払10人、貴族は支払済37人未支払21人、外人は支払済4人未支払4人、民間人とその他は支払済9人未支払12人であった。
- (11) 1856年に欧米の船舶が少なかったバンコクの港では、1859年1月1日に60隻、1864年11月12日に100隻以上が現れた (Donald 1969, p.191)。
- (12) 元妻エミリの死去後、3人の子育てと教会の御業に同時に対応しきれないブラッドリーは、1847年8月にアメリカに2年間帰国した。その際に彼は、タイに駐在していた宣教師との内紛によりABC FM教会を引退し、1848年2月にAMA教会 (American Missionary Association) に転入した。さらに、2人目の妻、サーラー・ブラッドリー (Sarah Bradley) と結婚した (Donald 1969, pp.125-130)。
- (13) ブラッドリーは、1851年にバーンコークヤイ川 (Klong Bangkokyai) にあるウッチャイプラシット砦 (Wichaiprasit Fort) の裏で、ブラッドリーの新たな屋敷を建築し、そこでAMA印刷所を経営した (Amphai 1972, p.61)。
- (14) 「旅詩」 (Nirad) は、旅による愛人と別れた悲しみや孤独の寂しさを表現する伝統的な詩である。
- (15) このジャンルの娯楽本は、主人公の名には、「チャク」か「フォン」が良くつけられたため、「ルーアン・ジャクジャク・フォンフォン」 (ジャクジャク・フォンフォンの物語) と呼ばれたと言われる。
- (16) スミス印刷所の出版物は、サオ・チン・チャー (Giant Swing) であるポー・レークの家 (Ban Polek)、ワット・コであるメー・プレームの家 (Ban Meaprem)、スミス教師のバーンコーレーム印刷所、テープ浮き家の印刷所など所定の場所で受け取る形で販売すると言う広告が出現した (『シャム・サマイ』1865, 1, 1)。
- (17) ワット・ボーウォーンニウェート印刷所の設立には、欧米宣教師からの印刷技術の支援を受けたことが推定できる。1837年に大蔵大臣ソムデッドチャオプラヤー・プラユラウォン (Prayurawongse) は、ブラッドリーの木製式印刷機を借りて娯楽本を出版しようとしたが、「木材のタイ文字活字の作成はシャムの技術者の能力では無理な作業だ」と諦めた。つまり、当時シャム人には、印刷技術が不足していたのである。そのため、モンクット親王は、宣教師の支援を受け、タイ文字活字を彫り書籍を発行できるように僧侶を訓練し、印刷所を設立したと考えられる (Matichon 2006, pp.18-19)。
- (18) 1907年には、全国112支店に拡大し、1907年期引受郵便物は339万5,862通に増加し、国際引受郵便物が183万2,956通 (送付183万2,956通、引受97万831通) であった。また、1907年期引受荷物は、国内荷物

4万2,287個と海外荷物2,379個であった。こうした郵便電報局の事業拡大から見て、20世紀におけるシャムの物流の発展が分かる。(Wright 1994, pp.204-206)

- (19) ティエンワンは、グループと同時代に出版物を発行した知識人である。彼は、定期発行紙の『ツンヤウィパーク・ポッチャナキット』(Tunyawipak Podjanakid 1900-1906)を発行し、社会・政府の批判や欧米文明化などの啓蒙思想を展開した。しかし、グループの『シャム・プラペート』と比べて、『ツンヤウィパーク・ポッチャナキット』の読者数は、1年目250人、2年目180人、3年目140人と言う比較の少なかった。それにもかかわらず、ティエンワンは、1年間に600パーツ以上の損失を出しながらも、「説明が必要ない理由」で1906年まで出版を続けた(Sukanya 1977, pp.56-57)。
- (20) 当時のシャムでは、雑誌と言う言葉は用いられないが、発行情、内容項目、外形を見れば、『シャム・プラペート』は、新聞よりは雑誌に近く、表紙にも「Monthly Magazine」と書かれている。『シャム・プラペート』には、シャム古代年代記に基づく歴史記事が初めて掲載されたため、積極的に評価されている。一方で、グループは、勝手に内容を修正し、歴史的現実とは異なった点がしばしばあったため、嘘つきだと批判された。
- (21) 『シャム・プラペート』の1年目は、モムチャオ・ワッチャリンのワッチャリン印刷所で出版された(Mananya 1982, p.77)。さらに、ワシラヤーン図書館も、ワッチャリン印刷所に『ワチラヤーン・ウィセート』の印刷を依頼したこともあった(Kammasumpatikasapa 1891, p.139)。
- (22) ワット・コ印刷所の創立者の名前は、出版物にSingとSinが表わされており、実際にどちらが正しい表記であるか明確ではない。
- (23) ワット・コ印刷所の最初の手動式印刷機は、ラチャウォン通り(Ratchawong Road)にあるARC・レーバイー商店から購入した「鳥の印刷機」(Thannok)と呼ばれるものであった。なぜなら、機械の横側には、鷲のマークが付いていたからである。当時は、電動機械がなかったため、印刷の際に手動により機械を操作した。その印刷機は、10年以上使用されたのち200パーツで売却された。その手動式の鳥印刷機の操作は、作業者4人で「使用する紙は、一晩水をかけて置き、次の日に印刷ができる状態になる。印刷するには、紙を1枚ずつ投入し、印刷・圧縮を繰り返し、紙の端を5冊ずつ裁断し製本した」(Anek 1996, p.12)と言う大変な作業と複雑な工程であった(Anek 1996, pp.12-14)。
- (24) ニティが前述したように、伝統的シャムは、文字よりも口頭で文化を伝達する社会である。すなわち、識字率の低かった民間人は、伝統的韻文の原稿を読み聞かせる文化に馴染み、芸術の美しさを、文章を読むことよりも耳で聞くことで認識した。そのため、物語や書籍の評価は、文章の書き方の上手さより、文章を読み聞かせる声で判断した。
- (25) 全国の学生数は、1912年12万2,800人、1915年13万3,445人、1920年20万1,665人、1925年57万2,083人、1930年67万6,717人へ増加を見せた(Warunee 1981, p.384)。
- (26) 教育省の下である教科書局(クロム・タムラー)は、大量の教科書を発行するため、1925年にポール・ピックケンパック百貨店(Pual Pickenpack)に電動式のモータ付印刷機と裁断機を注文した。その機械仕入の金額は1万2,950パーツ(印刷機8,200パーツ、裁断機4,750パーツ)であった(タイ国立公文書館、So.To. 9/87, 2)。
- (27) 1930年前後に鑄造工(Changkea)と言う職業が出現した。「ナイ・セー」(Nai Sea)の広告には、オリエンタル・ホテルの辺りで、30, 40, 48ポイントのタイ語・英語の銅合金活字の鑄造ができると書かれている。さらにバンコクにおける中国語新聞の出版の発展に伴い、中国語文字の活字の鑄造の需要が増加し、中国から機械や銅合金鑄造の型を導入した華人による作業場が増えた(Pracha 2002, pp.79-80)。

- (28) バムルンヌクーンキット印刷所 (Romgim Bumrongnukulkit) は、ルアン・ダムロンタマサーン (Luang Damrong Thammasan) により 1895 年にバムルン・ムアン通りで設立され、王室の作品、仏教書、教科書、学術書、小説などを発行した。従業員 70-80 人でオイルエンジン式印刷機 10 台を稼働したため、当時の大規模な印刷所の 1 つである (Matichon 2006, pp.36-37; Wright 1994, p.260)。
- (29) ソーポンピパット・タナコーン印刷所 (Rongpim Soponpipattanakul) は、華人の子孫、プラ・ソーボンアクソンキット (Phra Sophonaksornkid) により 1900 年にワン・ブラパー (Burapha Palace) の隣に設立された。彼は、ラーマ 6 世王の侍従官に勤めたことで、ラーマ 6 世王に親密な関係を結び、同王の作品やワチラヤーン図書館の書籍を大量に発行した (So Playnoi 2005, pp.50-54)。
- (30) タイ印刷所 (Rongpim Thai) は、クン・ソーピットアクソンカーン (Khun Sopitaksonkan 1869-1934) によりローンムアン通りで設立された。主な出版物は、『マハーバーラタ』(Mahabharata)、『千夜一夜物語』(Arubrathree)、『カタールリッタサーコーン』(Katha Saritsakon) などのインド・中国からの翻訳小説である。シャムにおいて輸入した外国語の小説を翻訳した最初の印刷所は、タイ印刷所であると推定されている (So Playnoi 2005, pp.55-58)。
- (31) 本稿では、書籍出版を中心に分析するため、これらの印刷所を代表として取り上げる。しかし、新聞出版も盛んであった 20 世紀初期には、チノー・シャムワラサップ印刷所 (Rongpim Chino Siam Warasup)、バンコクタイム印刷所 (Rongpim Bangkok Time)、シャムプリープレス印刷所 (Rongpim Siam Prepress) などの大手印刷所も存在した。さらに印刷所は、利潤追求の目的で出版物を発行するため、一定の出版物だけではなく、新聞を主に発行していながらも、機械の稼働時間が空いているときに、書籍を出版したこともある。ただし書籍出版に比較して毎日に活字を揃え印刷する新聞出版は、相当困難な作業である。そのため、これらの新聞印刷所の書籍点数は少ないため、本研究では研究対象物にしない。
- (32) 例としてあげれば、1924 年 6 月 30 日にバムルンヌクーンキット印刷所は、教科書局から教科書印刷の許可を得た (タイ国立公文書館、So.To. 5/67,7)。
- (33) 1930 年代の教科書改革は、1932 年立憲革命につながっている。1932 年の立憲革命後の政府は、従来の教育制度を改革する方針を示し、1930 年代後半において教科書の改訂を繰り返した。

## 参考文献

### 日本語

- 遠藤元 (2010) 『新興国の流通革命—タイのモザイク状消費市場と多様化する流通』 日本評論社。
- 橋本健二 (1991) 「文化としての資本主義・資本主義の文化」 宮島喬、藤田英典 (編) 『文化と社会—差 異化・構造化・再生産』 有信堂高文社, pp97-117。
- ベネディクト・アンダーソン (2007) 『定本想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』 書籍工房早山。
- 箕輪成男 (1983) 『歴史としての出版』 弓立社。
- 箕輪成男 (1997) 『出版学序説』 日本エディタースクール出版部。
- 村嶋英治 (2002) 「タイにおける華僑・華人問題」 『アジア太平洋討究』 4, pp.33-47。

### 英語

- Caves, E. Richard (2000) *Creative Industries: Contracts Between Art and Commerce*. Massachusetts: Harvard University Press.

- 
- Craig, R. (1973) "The Case of K.S.R. Kulap: A Challenge to Royal Historical Writing in Late Nineteenth Century Thailand" *Journal of the Siam Society*. Lxi/2.1973. pp.63-90.
- Darnton, R. (1982) "What is the History of Books?" *Daedalus* Vol. 111. No.3. pp.65-67. <http://nrs.harvard.edu/urn-3:HUL.InstRepos:3403038>. (November 3, 2016)
- Donald, C.L. (1969) *Mo Bradley and Thailand*. Michigan: William B. Eerdmans Publishing Company.
- Habermas, J. (1991) *The Structural Transformation of the Public Sphere*. New York: MIT press.
- Hesmondhalgh, D. (2002) *The Cultural Industries*. London: SAGE
- James C., I. (1971) *Economic Change in Thailand, 1850-1970*. Stanford: Stanford University Press.
- Jory, P. (2000) "Books and the Nation: The Making of Thailand's National Library" *Journal of Southeast Asian Studies*. Vol31 (2). pp.351-373.
- Karnitha, K. (1990) *Commercial Book Publishing in Thailand (1970s-1980s)*. Leicestershire: Loughborough University.
- Miege, B. (1989) *The Capitalization of Cultural Production*. London: Intl General.
- Nidhi, E. (2011) "Reading Habits of Thai People in a Cultural Dimension" *Thailand Conference on Reading 2011*. Bangkok: TK Park. pp.110-116.
- Parkpume, V. (2015) "The Beginning of Liberalism in Thailand: Dan Beach Bradley and Bangkok Recorder" *Journal of the Graduate School of Asia-Pacific Studies*. No.29. pp.21-36.
- Ryan, B. (1991) *Making Capital from Culture: Corporate Form of Capitalist Cultural Production*. New York: de Gruyter
- Thanapol, L. (2008) *The Formation of the Discourse and Cultural Authority of Literature in Modern Thailand (1860s-1950s)*. Wisconsin: University of Wisconsin
- Thongchai, W. (2000) "The Quest for 'Siwilai'" *The Journal of Asian Studies* 59. no.3. Association for Asian Studies. pp.528-549.
- Towse, R. (2003) *A Handbook of Cultural Economics*. UK: Edward Elgar Publishing, Inc.
- Wright, A. (1994) *Twentieth Century Impressions of Siam: Its History, People, Commerce, Industries, and Resources*. Bangkok: White Lotus Co., Ltd.

#### タイ語

- Anek N. (1996) 『シャム商店の伝説』 (ตำนานห้างร้านสยาม) Tonaor Grammy.
- Anumanrachaton (1970) 『過去を振り返る : 第3編』 (ฟื้นความหลังเล่ม 3) Suksid.
- Amma S. (1982) 「国際貿易と国内の経済」 (การค้าระหว่างประเทศกับกับระบบเศรษฐกิจภายในประเทศ) Chatthip, N. & Suthii, P. (1982) 『1941 年までのタイ経済史』 (ประวัติศาสตร์เศรษฐกิจไทยจนถึง พ.ศ. 2484) Thammasart University pp.145-165.
- Amphai, J. (1972) 『タイにおける出版史』 (ประวัติและวิวัฒนาการการพิมพ์ในประเทศไทย) Chulalongkorn University.
- Boonpisit, S. (2013) 『コーソーロー・グループの著作物 : シャムの近代初期における支配層と知識創造』 (งานนิพนธ์ของก.ศ.ร.กุหลาบ: ชนชั้นนำและการสร้างองค์ความรู้ในสมัยต้น ยุคใหม่) Chulalongkorn University.
- Chatthip, N. & Suthii, P. (1982) 「1851-1900 年におけるタイ経済」 (เศรษฐกิจไทย พ.ศ. 2394-2453), Chatthip, N. & Suthii, P. 『1941 年までのタイ経済史』 (ประวัติศาสตร์เศรษฐกิจไทย จนถึง พ.ศ. 2484) Thammasart University pp.169-201.



- Chusri, K. (1975) 『タイにおけるペーパーバック出版の変遷』 (พัฒนาการของหนังสือปกอ่อนในประเทศไทย) Chulalongkorn University.
- Damrong, R. (1969) 『図書館の伝説』 (ตำนานหอพระสมุด) Aksornchareontut.
- Dom Sukawong (2018) 『100 年間のタイ映画』 (หนึ่งศตวรรษภาพยนตร์ในประเทศไทย) www.thaifilm.com/articleDetail.asp?id=17 (2018 年 5 月 7 日).
- Kammasumpatikasapa (1891) 『ワチラヤーン図書館の報告書：第 8 年』 (รายงานหอพระสมุดวิชญาณ จำนวนปีที่8) Kammasumpatikasapa.
- Mananya T. (1982) 『コーソーロー・グループ』 (ก.ศ.ร.กุลลาบ) The Social Science Association of Thailand.
- Matichon (2006) 『シャム・ピムマカーン』 (สยามพิมพ์มการ) Matichon.
- タイ国立図書館 (1963) 『年代記第 10 編：第 10 後半、第 11-12』 (ประชุมพงศาวดารเล่ม 10: ภาค10 ตอนปลาย ภาค 11-12) Krurusapa printing.
- Neangnoi, S. (1992) 『ラタナコシンの物理的構造』 (องค์ประกอบทางกายภาพ กรุงรัตนโกสินทร์) Chulalongkorn printing.
- Pracha, S. (2002) 『タイ活字の痕跡』 (แกะรอยตัวพิมพ์ไทย) Rikko.
- Rongpim, N. (1923) 『ナーコンソงคลูโอ』 (นครสงเคราะห์) Rongpim Nhangsuepimthai.
- Smith, S. J. (1886) 『シャムの使節団』 (ราชทูตสยาม) Samuel J. Smith.
- So Bunsaner (1989) 『タイ文字の軌跡』 (ตามรอยลายสือไทย) Watin publication.
- So Playnoi (2005) 『初期の出版社』 (สำนักพิมพ์สมัยแรก) Kho Nhangsue.
- Sod K. (1971) 「名誉・自由・平和」 (เกียรติ, อิสระภาพ, ความสงบ) 『ナイー・ウォラキッドバンハーンの葬式記念書』 (อนุสรณ์ในงานพระราชทานเพลิงศพนายารกิจบรรหาร) Kanpimpanit pp.15-29.
- Somnuk P. (2005) 『国営郵便局から郵便局株式会社へ改組するための準備』 (การปรับตัวของกิจการไปรษณีย์เพื่อรองรับการแปรรูปจากรัฐวิสาหกิจการสื่อสารแห่งประเทศไทยเป็นบริษัทไปรษณีย์ไทย จำกัด) Ramkhamhaeng University.
- Sukanya, T. (1977) 『絶対王政におけるタイの新聞史』 (ประวัติการหนังสือพิมพ์ในประเทศไทยภายใต้ระบอบสมบูรณาญาสิทธิราช) Thai Wattana Panit.
- Sukanya, T. (1985) 『ブラッドリー医師とシャムの新聞』 (หมอบรัดเลย์กับการหนังสือพิมพ์แห่งกรุงสยาม) Matichon.
- Sukanya, T. (1988) 『モンクットクラオと新聞』 (พระบาทสมเด็จพระมงกุฎเกล้าเจ้าอยู่หัวกับการหนังสือพิมพ์) King Vajiravudh Foundation.
- Tanaphog C. (2009) 『1884-1905 年における「ワチラヤーン」とシャム支配層の知識の追求』 ( “วิชิญาณ”กับการแสวงหาความรู้ของชนชั้นนำของสยาม พ.ศ. 2427-2448) Chulalongkorn University.
- Warunee O. (1981) 『1868-1932 年のタイ社会における教育』 (การศึกษาในสังคมไทยพ.ศ. 2411-2475) Chulalongkorn University.

#### タイ語新聞

『シャム・サマイ』 (จดหมายเหตุ สยามไสมย)

『シャム・ブラペート』 (สยามประเภท)

#### 未発行一次資料

タイ国立文書館 So. To. 5/67, So. To. 9/1, So. To. 9/47, So. To. 9/87